

西夏語研究と法華經(Ⅳ)

——西夏文字の基本構造と双生字論

西田龍雄

I 西夏文字の基本構造

1 西夏文字誕生の背景

唐代に吐蕃王朝が興起したことは藏族及び藏族文化の東方への発展を促した。同時に藏伝仏教と共に仏典言語であったチベット文語（古典チベット語）の伝播普及を促進したのである。東北方に居住した氐羌系諸部族（牦牛羌、白馬羌、宕昌羌、多彌、蘇毗、党項など）と東方に隣居した西南夷系諸部族（白狼、附国、嘉良夷、東女国など）が支配する小邦を漸次その傘下に収めた。この動きは一方で藏語方言群を形成し、以後、前者はアムド地区の方言群を、後者はカム地区の方言群を成立させた。¹⁾

チベット文語の存在と普及は、大部族であったギャロン族や普米族さえ自部族独自の書写語の創作を許さないほど大きかった。そのような状況の中で本来の居住地松州（今の松潘）から北上して、夏州（現在の陝西横山県）・銀州（現在の陝西米脂県）に移動した拓跋部を核心とする夏州党項族は、AD1032年に至って西夏国を建設した。

11世紀以降の西夏国構成員も同じように氐羌系統と西南夷系統の諸部族が主流を占めていて、多部族多元文化を形成し、国内には種々の口語が話されていたに違いないが、²⁾ その口語を基にそれらを超えた共通の書写言語を創作し、建国4年後のAD1036年にはそれまで使っていた漢文と藏文に替わる独自の書写言語西夏語を誕生させる目的で、手初めにその新言語を適切にそして効果的に書き表すために考案した西夏文字を公布した。これは、正に一大事業であった。その文字は、漢字の構成原理を模倣して造られた新しい表意文字であり、契丹文字以後二番目に東アジアに出現した、いわゆる擬似漢字の一つであった。

西夏語は、漢語と類似して単音節を主体とする言語であったため漢字に似た表意文字はその表記に適していた。しかし西夏文字は、漢字とは異なって、一定の年月を経過して自然の流れの中で整えられて来たものではなく、少なくとも象形の段階から漸次発達し整備され一つの集合体に到達したものではなかった。全体で六千字余りが創られたが、それらの字形は、ある方針を示した設計図のもとに数人の人々が共通した思惟を基盤にして同時に造り出したものである。いわば数人の人の智慧の結晶であった。

全体の構造原則、各字形の構成に導いた過程については何一つ記録されていない。至少その種の全般的な記録は今まで伝えられていないのである。実践された結果のみが残されている。しかし、この文字は新しい型の表意文字の提案であった。

筆者は1960年代に西夏文字の基本構造についてその概要を記述し発表した²が、その後90年代半ば頃に至ってこの文字の組織にそれまで気付かなかった新しい特性があることを発見した。筆者の新しい発見は一括して双生字論とよんでおきたい。

筆者は、この文字は表意文字の傑作であったと考えている。手本となった漢字よりも数段優れた表意文字であった。表意文字に綴字的な発想を加えて文法情報を盛り込み、意味の効果的な弁別、声調変化の表記などの手法は、ほかの文字には見られないすばらしいアイデアであり、特異な発想であった。

これは日本人が実現した表意文字漢字から2種の表音文字仮名を創作した偉業に比肩し得るもう一つの表意文字システムの大革命であったと言い得るのではないだろうか。また時代はずっと降るが、1980年に正式に公布された四川省彝族が考案した規範彝文とも規を一にしている。³⁾

本稿ではまず当初60年代に考えたこの文字の基本構造を解説し、そのあと90年代後半以降に筆者が発想を転換し新しく得た成果について、その出発点と以後の展開について簡略に述べてみたい。

2 西夏文字の総字数

1036年に公布された当時、この文字は果たしてどれくらいの字数が創作されていたのか全く記録されていない。12世紀の初め頃、全体の標準字形を集録し

た『同音』旧版(刊本1132年)には6100数字が収められている。その後改定された『同音』新版(刊本年代不詳)は前部と後部の数頁が欠けるが、その後偶然見付けた跋の断片によると、5840字を集録したと記される。⁴⁾ 全体の字数は約6000字造られていたと考えてよいであろう。常用字はおおよそその半数以下であったと理解できる。しかし現存文献中にほとんど使われていない文字が相当数存在する。

3 西夏文字字形構成の原則

まず全体の概観と基本原則について述べる。これは言わば平面的な考察である。この文字の個々の字形は、漢字の構造から類推して容易に分解することができる。簡潔に言えば、冠偏旁などの文字要素と呼ぶ部分とそれを組み合わせる様式からなる。たとえば 𐽀「頭」は 𐽀 (偏) と 𐽀 (中) と 𐽀 (傍) が $\overset{a}{\square}\overset{b}{\square}\overset{c}{\square}$ の型で組み合わせられていると分解する。文字要素の抽出には細部には問題がある(たとえば 𐽀 を 𐽀 と 𐽀 に分折できるか否かなどの問題)が、筆者は約360種の文字要素があって、それが44種の様式で組み合わせられていると考える。⁵⁾

それ故、約6000字ある西夏文字の個々の字形は次の4つの条件によって決定されていることになる。

1) 文字要素の種類の選び方 たとえば 𐽀 牢 と 𐽀 獄 は a 𐽀 と b 𐽀 を選んでいる。

2) 文字要素の数の選び方 牢 も 獄 も 2つの要素を選んでいる。

3) 文字要素の組み合わせ様式の選び方 牢 も 獄 も 2つの要素を 偏 と 旁、左 と 右 に並べる様式 $\square\square$ を選んでいる。

4) 一つの組み合わせ様式内の要素の具体的な配置の仕方 上例、牢 と 獄 は 1) から 3) の条件は全く同じであるが、選び出した2つの要素をどちらを左(偏)の位置に配置するかで対立している。 $\overset{a}{\square}\overset{b}{\square}$ か $\overset{b}{\square}\overset{a}{\square}$ か。同じように 𐽀 水 と 𐽀 魚 は $\overset{a}{\square}\overset{b}{\square}$ と $\overset{b}{\square}\overset{a}{\square}$ のように $\overset{a}{\square}\overset{c}{\square}$ か $\overset{c}{\square}\overset{a}{\square}$ の配置で対立する。

西夏文字の字形はこの4つの条件のいずれか1つ以上の条件で相違していることになる。⁶⁾

4 西夏人自身の字形分解

西夏人自身の字形の分解例が『文海』や『文海維類』などの韻書に記録されているが、上述のような字形分析ではなく、字形相互間の関係の指示が中心であった。たとえば『文海』平声31韻にある𐵄 wuN「柔かい」「仁」には𐵄「もつ、主る（つかさどる）」の𐵄（中）と𐵄「孝」の𐵄と指示する。即ち𐵄は𐵄の派生字であり、𐵄孝も柔の派生字であるという認識である。この指示はこれら3字形の相互関係を示したに過ぎないことになる。しかし、𐵄孝を見ると𐵄心の𐵄（右）と𐵄柔の𐵄（右）と指示されていて、西夏人は、心を柔かにすることが孝行であったと考えていたと解釈できるから、この指示は大きい意味をもってくる。

西夏人が提供するこのような情報は、西夏人の考え方を字形上によく伝えていて貴重であり、あとで述べるようにこの文字研究の別の一つの方向を示唆している。しかしながら、その分解が文字全体に渡って残ってはならず、また字形相互の関連は示しているものの、文字全体の組織の分析にはつながらない。この文字の文字学的研究は字形自体を分解する方向から進めていかねばならない。西夏人自身の分析について再評価し、あとで詳述する。（p. 259-参照）

5 西夏文字の単体字と合体字——文と字

西夏文字は若干の単体字（文）と多数の合体字（字）からなっている。単体字とは、それ以上分解できない字形のことであり、合体字とは2つ以上数個の文字要素に解体できる字形を指している。西夏文字は少数の文と多数の字の集合体である。

6 単体字と部首

西夏文字には次のような単体字形があるが、なぜこれらの意味が単体字形で書き表されたのか、その理由は明確にできない。いわば漢字の部首にあたるが、決して象形字形ではない。

𐵄 素足	𐵄 禾（いね）	𐵄 苦しい
𐵄 高い、上	𐵄 枷（かせ）	𐵄 樹
𐵄 小	𐵄 薄い	𐵄 昆虫

𠂔 人	𠂔 梯子	𠂔 腰
𠂔 半分	𠂔 種	𠂔 辛
𠂔 皮	𠂔 虫	𠂔 母
𠂔 濁	𠂔 時	𠂔 迫
𠂔 単	𠂔 牙	

7 合体字の分解と文字要素の認定

大部分の文字要素はこのように単独で使われることがなく、数個の合体として出現し、多くの場合、それ自体特定の意味と関係している。たとえば𠂔は次の文字群の偏となって現れ、馬に関係する意味を表現しているから、漢字の部首：馬に該当する要素であったと見て誤りはない。

𠂔 馬	𠂔 騾馬
𠂔 銜鉄（くつわ）	𠂔 馳せる
𠂔 乗馬	𠂔 轡（たづな）
𠂔 家畜	𠂔 蹄
𠂔 飼う	

ただしこの要素を含む字形がすべて馬に関するものとは限らない。𠂔 𠂔 nggu（上1）-kañ（平17）「中央」や𠂔 mbüñ（上3）「象」などがそれである。

しかし一つの文字要素に一つの意味を仮定して部首のように扱った方がこの文字全体を整理するのに便利であるので、筆者は各文字要素を部首と見做して次のように一応の意味を仮定している。（上掲単体字は除いている）

017 𠂔 木（冠）	020 𠂔 之（冠）	026 𠂔 石（冠）
028 𠂔 金（冠）	030 𠂔 山（冠）	033 𠂔 虫（冠）
038 𠂔 舌	041 𠂔 非	045 𠂔 歹（がつ）
049 𠂔 動	052 𠂔 老	054 𠂔 陰
056 𠂔 造	061 𠂔 心	069 𠂔 糞
072 𠂔 転	080 𠂔 馬	083 𠂔 招
086 𠂔 売	087 𠂔 遠	102 𠂔 音

105	𠂔	足	106	𠂔	頭	109	𠂔	無
112	𠂔	握	118	𠂔	命	120	𠂔	鉢
123	𠂔	齊	130	𠂔	菜	132	𠂔	偽
137	𠂔	祐	138	𠂔	昔	144	𠂔	草
151	𠂔	睡	152	𠂔	鼻	153	𠂔	門
154	𠂔	語	155	𠂔	擊	156	𠂔	齒
159	𠂔	怖	159 b	𠂔	速	161	𠂔	熟
162	𠂔	長	164	𠂔	種	169	𠂔	希
171	𠂔	子	179	𠂔	財	181	𠂔	水
182	𠂔	言	184	𠂔	火	186	𠂔	見
187	𠂔	前	192	𠂔	腹	200	𠂔	遊
206	𠂔	獸	210	𠂔	土	216	𠂔	氣
217	𠂔	虫	218	𠂔	多 (むじな)	226	𠂔	赤
235	𠂔	指	236	𠂔	手	239	𠂔	糸
241	𠂔	越	243	𠂔	惡	255	𠂔	反
256	𠂔	鼻	260	𠂔	円	262	𠂔	輪
269	𠂔	肉	280	𠂔	盜	285	𠂔	鬼
287	𠂔	数	289	𠂔	教	290	𠂔	習
291	𠂔	幢	296	𠂔	豊	303	𠂔	目
304	𠂔	夏	305	𠂔	鳥	312	𠂔	迅
315	𠂔	風	319	𠂔	坐 (底)			

これらの文字要素の字形は、象形字形から発達したものではない。中には漢字の部首と類似した形もあるけれどもその借用ではなく、西夏人が独創したものであった。⁷⁾ 重要なことは、文字要素相互の間に意味上のつながりに基づいた派生関係を発見できることである。一挙に全体を造り上げた文字組織の特徴である。

8 文字要素の字形の派生関係

創作者の思惟を反映する文字要素の派生関係の例を若干挙げる。

i 動物を代表する部首は派生形で表された。

𠂇 人 𠂇 獸 𠂇 虫 𠂇 豸 𠂇 鳥

また動物の身体の部分を示す部首も同様に連繋する。

𠂇 指 𠂇 手 𠂇 皮： 𠂇 足 𠂇 頭

ii 前方を示す部首

𠂇 見 𠂇 前 𠂇 腹

iii 熟すと長く伝えるものは連繋する。

𠂇 熟 𠂇 長 𠂇 族

iv 物の先端にあるものは連繋する。

𠂇 鼻 𠂇 門

v 行為とその遂行に用いる用具は連繋する。

𠂇 馬 𠂇 招く

vi 越えると悪いは連繋する（物事は度を越えると悪につながる）

𠂇 越 𠂇 悪

9 文字要素の特異な組合せと西夏人の発想

このように文字要素の派生には西夏人の独特の発想が認められる。発想の特異さは個々の字形の構成においてもっと顕著に現れた。

まず、要素の簡単な組み合わせ例を挙げよう。

1. 𠂇 と 𠂇 の組み合わせ自体は独立して使わないが、他の要素を偏として付け、特定の字形を造る。ある種の入れ物を表現する。

𠂇 𠂇 (上37) 袋 (布偏をつける) 𠂇

𠂇 liu (上2) 瓶 (水偏をつける) 𠂇

𠂇 ndien (上35) 墳 (土偏をつける) 𠂇

𠂇 liu (上32) 胃 (腹偏をつける) 𠂇

𠂇 lafi₂ (上14) 塚 (𠂇 偏と土冠をつける) 𠂇

蓑 ni (?)

囊 (木冠と布偏をつける) 𦃟

2. 𦃟^ㄣと干と乚の組み合わせは、物を挿し込む行為を基本とするものを表現する。

a. 𦃟^ㄣg^wif^ㄣ (上10) 着衣 (衣偏をつける) 両手を挿し込むもの = 衣服

𦃟^ㄣg^wif^ㄣ (上10) 着る (更に^ㄣ冠をつけて動詞であることを示す⁸⁾)

𦃟^ㄣg^wi^ㄣ (平67) 着させる (人偏をつける) 使役動詞 (緊喉母音)

𦃟^ㄣg^wif^ㄣ (平11) 裘 (皮ごろも) (皮偏をつける) (漢語: 裘)

𦃟^ㄣl^wɔ^ㄣ (上62) みすばらしい衣 (久 古い醜いをつける)

𦃟^ㄣphon (平54) 懷 (ふところ) (人偏をつける)

𦃟^ㄣtan (平24) 単衣 (ひとえ) (薄いを偏をつける) (漢語: 単)

𦃟^ㄣtan (平24) (契) 丹 (単衣に木冠をつける) (音写語)

b. 物を挿し込む行為から間に物を貼る・補うに発展する。

𦃟^ㄣnd^ㄣiuf^ㄣ (上3) 貼る

𦃟^ㄣm^ㄣvɛ^ㄣ (上54) 補う (鼻偏をつける)

𦃟^ㄣɬ^ㄣ (平69) 補う (^ㄣ冠をつけて動詞であることを示す)

𦃟^ㄣp^ㄣa^ㄣ (平64) 補う・埋める (土偏をつける)

𦃟^ㄣmbiuf^ㄣ (上6) まとめる・刪る、縮める。

c. 物を挿し込む行為から更に孔をあける行為につながる。

𦃟^ㄣtsh^ㄣ*i^ㄣ (平10) うが^ㄣつ (手偏をつける)

𦃟^ㄣts^ㄣ*an^ㄣ (平24) うが^ㄣつもの (金冠をつける。漢語: 鑽)

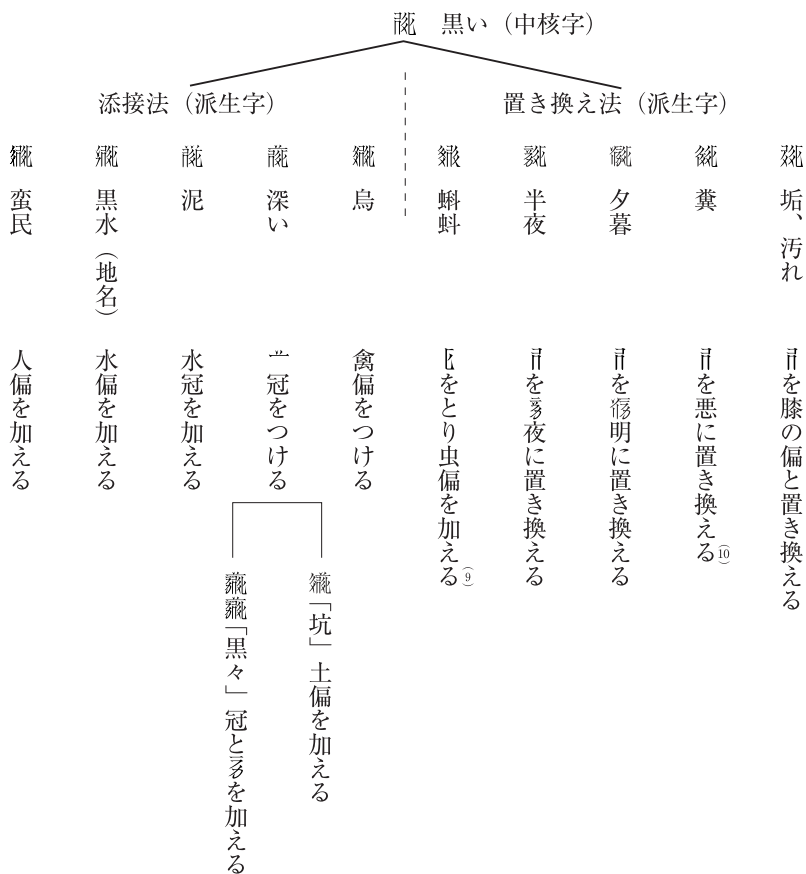
𦃟^ㄣnu^ㄣ (平1) 錐 (きり) (金冠をつける)

𦃟^ㄣsar₂^ㄣ (平83) 針治療をする (患うの偏と中央をつける。針をさす)

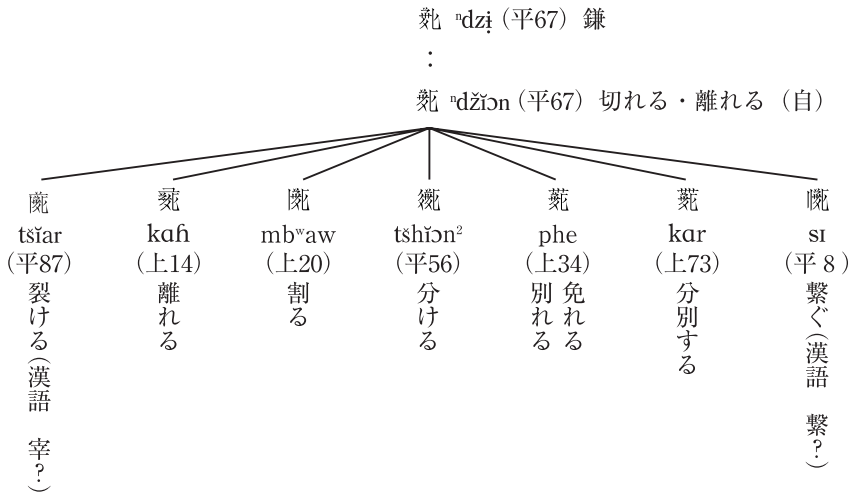
10 字形網の設定

このような字形の共通性と表現する意味の連繋関係の発見は、この文字全体の背後にある文字網を明らかにして重要である。文字網の若干例をつぎに掲げる。

[例1] 穢「黒い」を中核字とする派生字網

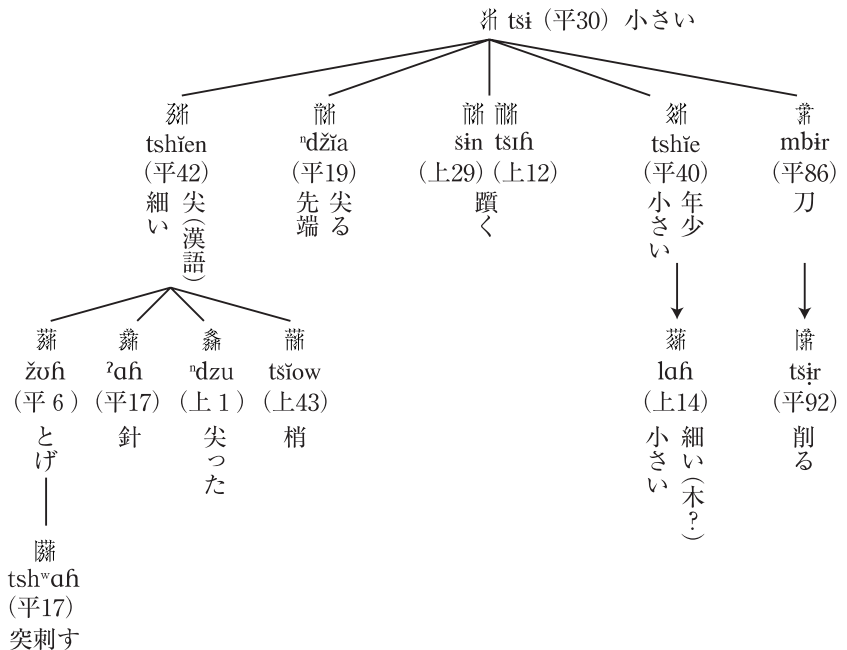


「黒い」を中核字とする意味分野は、暗黒、坑（奥深く暗い所）から蚪蚪（おたまじゃくし）まで包括する一方で、汚れと関わって糞まで表現するのである。
 (cf. WrT *nag-po* 黒い、*nags* 密林、*rnyog-po* 汚濁、*chu-nyog* 汚水、*snyags-snyigs* 垢穢、WrB *a-nak* 黒、*nak* 深い・暗黒、*a-nyac* 汚垢・汚物)

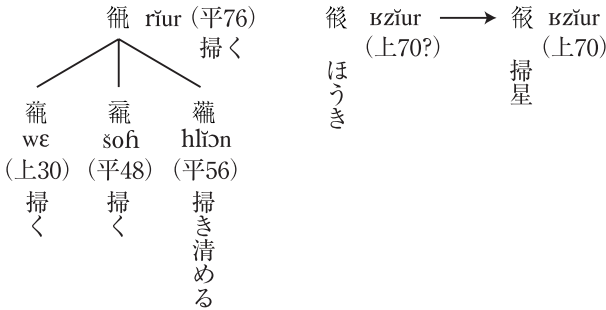
[例 2]¹¹⁾

意味の細かい差異は待考

[例 3]



[例4]



11 2種類の派生手順 添接法と置き換え法

上掲例からわかるように西夏文字には2種類の派生手順があった。添接法と置き換え法である。そして基本字と派生字の間には i) 音形式を基にした連繋と、ii) 意味を基にした連繋、そして iii) 音形式と意味の両方を基にする連繋があった。(文字網としてとらえる場合は、中核字と呼ぶが、派生字一般に対立する字形としては基本字と呼ぶことにする)

まず a 添接法による派生から説明しよう。

基本字に別の文字要素を添接して派生字を造る。次のような例がある。

a i 音形式を基にする派生 (形声字)

𪛗 lif (平29) 風： 𪛗 lif (平29) 松 (木冠をつける)

𪛗 ʰdzī (平67) 立てる： 𪛗 ʰdzī (平67) 柱 (木冠をつける)

𪛗 paf (上17) 切れる： 𪛗 phaf (平20) 切る (人偏をつける)

a ii 意味を基にする派生 (会意字)

𪛗 ʰdzief (上35) 教える： 𪛗 ew (平44) 学ぶ (人偏をつける)¹²⁾

𪛗 ʰdzīn₂ (平56) 切れる： 𪛗 kaf (上14) 離れる (冠をつける)

𪛗 mīuf (上3) 動く： 𪛗 ndon (上47) 動く (漢語借詞) (冠をつける)

a iii 音形式と意味双方を基にする派生 (形声・会意字)

𪛗 saw (平43) 明るい： 𪛗 saw (平43) 照らす (旁を加える)

𪛗 lon (上47) 球： 𪛗 lon (上47) 寝転ぶ (旁を加える)

𪛗mbi₂ (平67) 尿： 𪛗mbi (平67) 放尿する（人偏をつける）

a i は形声字、a ii は会意字、a iii は形声・会意字と呼んでもよい。

b 置き換え法

基本字の一部を別の要素に置き換えて派生字を造る。

b i 音形式を基にする派生

𪛗nañ (平17) 夜： 𪛗nañ (平17) 明日（旁を越にかえる）

𪛗rar (平82) 役所： 𪛗rar (平82) 離れる、遠い（偏を遠にかえる）

b ii 意味を基にする派生

𪛗ndif (上10) 字： 𪛗ñ^wu₂ (上1) 筆（旁を作るにかえる）

𪛗ñgion (平72) 着る： 𪛗^dz^wəw (平43) 襟（旁を高、上にかえる）

𪛗riḡ (平74) 馬： 𪛗^ziḡ (上78) 銜鉄（旁を口にかえる）

b iii 音形式と意味双方を基にする派生

𪛗rar (上73) 流れる： 𪛗rar (上73) 泉（旁を水にかえる）

𪛗[?]yi (平30) 謂（N）： 𪛗[?]yi (上28) 謂う（V）（偏の形が対立する）

𪛗^dzieñ (上35) 教える： 𪛗^dzieñ (上35) 師（旁を言にかえる）

b iii はどちらを基本字と認め得るか派生字との弁別が難しい。

12 対称文字と否定文字の創作

次に西夏文字構成法の大きい特徴としたい対称文字と否定文字を挙げよう。

対称文字

i) 同じ文字要素を左右対称の位置に配置する ^a𪛗𪛗 字形を対称文字と呼ぶ。この構成法は、林絲などのように漢字にもある。

𪛗ndif (平14) 分ける	𪛗 ^š ow ₂ (上46) 双	𪛗 ^š ar (平82) 棘（とげ）
𪛗ndur (上76) 比べる	𪛗 ^{tš} ion (平55) 集める	𪛗mur (平84) 唇

ii) 中央に縦一画を置き、その左右に同じ要素を対称的に並べる $\overset{a}{\square}|\overset{b}{\square}$

𐰇 tef (上33) 斉しい	𐰇 𐰃 ^w Ir (平77) 競う	𐰇 kq (上56) 稱 (はかる)
𐰇 𐰃 ^z iow (平50) 串	𐰇 𐰃 ^y ar (平82) 立つ	𐰇 safi (平17) 銭差
𐰇 wā (上56) 広い	𐰇 lā (平64) 間	𐰇 kq (平63) 第七

iii) $\overset{a}{\square}\overset{b}{\square}$: $\overset{b}{\square}\overset{a}{\square}$ 対称文字 2 字の間で意味上対称関係が成立する場合がある。また、2 音節単語はしばしばこのような関係にある 2 字で表記される。

𐰇 nur (上76) 指	𐰇 𐰃 ⁿ ow (平52) 爪	𐰇 𐰃 ^m ufi (上25)-tsifi (上10) 蝨
𐰇 𐰃 ^d ziu (平2) 雷	𐰇 hlā (平64) 電	𐰇 𐰃 ^m afi (平20)-kh ^w i (上61) 鐘
𐰇 kh ^w i (上28) 牢	𐰇 𐰃 ^{en} (上37) 獄	𐰇 𐰃 ^s i (平30)-ŋgefi (上33) 旋風
𐰇 tq (平63) 手	𐰇 tafi (平17) 打つ	𐰇 pi (平69) 𐰇 pi (平67) 議論(する) ¹³⁾

iv) また $\overset{a}{\square}\overset{b}{\square}$: $\overset{b}{\square}\overset{a}{\square}$ のような形で対称文字 2 字の間で意味上対称関係が成立する場合があるが、例は少ない。

𐰇 war (上73) 枝	𐰇 phq (上56) 葉
𐰇 piuh (上3) あぶる、焼く	𐰇 piufi (平51) 焼く

次の数例は対称文字ではないが 2 音節単語が調和的字形で表記された例である。 $\overset{a}{\square}\overset{b}{\square}$ - $\overset{a}{\square}\overset{b}{\square}$ または $\overset{a}{\square}\overset{b}{\square}$ - $\overset{a}{\square}\overset{b}{\square}$ の型をもっている。

𐰇 𐰃 ⁿ dien (上37)-tq (平63) 休息	𐰇 𐰃 ^m iŋ (上64)-safi (上14) 枯竭(かわく)
𐰇 𐰃 ^m biufi (上3)-mīe (平34) 招換	𐰇 𐰃 ^y ir (上72)-ʔyīe (上68) 誅伐
𐰇 kq (平64)-𐰃 ^d zi (平30) 恐懼	𐰇 hl ^w e (平61)-lufi (平27) 項領(首すじ)

また一定の母音の調和を示す $\overset{a}{\square}\overset{b}{\square}$ - $\overset{b}{\square}$ (-afi-i) の型もある。

𐰇 pafi (平20)-pi (平30) 父親
𐰇 𐰃 ^d zafi (平20)-si (平30) 種族

対称文字と並んで否定文字の存在は、西夏文字の字形をより特徴づける。漢字にはこれに類する構成法はなかった。

否定文字

否定文字には2種類がある。i 関係否定 𐰇 mif (平11)「不」を偏𐰇で代表する 𐰇 型と、ii 存在否定 𐰇 mef (平36)無を旁の形で代表させる 𐰇 型。

i 関係否定字

𐰇 mbif (上10) 低い	𐰇 san (平25) 山	𐰇 dzef (上33) 单	𐰇 t'ief (上11) 对
𐰇 šow (平53) 集	𐰇 san (平24) 散	𐰇 tsi (平30) 小	𐰇 ma (上23) 大
𐰇 nd*ī (平69) 捷	𐰇 lon (上47) 懶		

ii 存在否定字

𐰇 khif (上10) 精気	𐰇 mīef (平39) 屍	𐰇 maf (平20) 母	𐰇 wīq (平72) 寡
𐰇 nīef (平39) 心	𐰇 mī (上61) 忘	𐰇 ykiē (上59) 音	𐰇 mef (平36) 寂
𐰇 ?war (上73) 物、財	𐰇 lu (上51) 貧		

特に否定字には西夏人の思惟がよく反映されていた。上掲例のように精気の無いものが屍であり、縁因縁と存在否定からなる 𐰇 譬喩は、似ていて参考にはなるけれども因果関係はないものとする解釈が字形に伝えられている。このような思惟の反映は、先に挙げた『文海』『文海雜類』などの韻書に残る西夏人の分解が大きい根拠を与えてくれる。その観点から、個々の字形の成立を再検討する必要が生まれてきた。

13 西夏人の使った用語と分類

西夏人が字形の分解に使った用語には、次の数種がある。

(1)	(2)	(3)	(4)	(i)	(ii)	(iii)	(5)
							
𐰇	𐰇	𐰇	𐰇				𐰇
偏	旁(助)	冠(頭)	下				中心

(6) (i)	(ii)	(iii)	(7)	(8)	(9)
					
宛 円(囲い)			蹴 全	骸 脚	蹴 除

これらの指示は大原則にすぎず実際には適当な解釈を加えて使っている。

偏・旁・冠などと訳したが、実体は漢字に関してわれわれが知っている常識(偏旁冠脚)とは必ずしも合致しない。その位置にある一つの要素を指すのではなく、数個の要素を同時に含めることも多いし、中心や字形を囲んでいる要素とよんでいるのは特別な用語である。全は全体の字形を指し、除くは特定の要素を削除する意味である。脚は使用例はごく少なく、具体的には𨮒の字形の肉偏を指している。¹⁴⁾ ときには奇妙と思える説明も見られる。たとえば𨮒 tien² 釘の字形を𨮒 s^wan (平25) 門(かんぬき) 栓(漢語借詞)の下と𨮒 nu (平1) 錐(きり)の下という分解は承認しにくい。

特に派生字から基本字を説明したり、単体字を合体字から解釈するところは不合理さが目立っている。それにも拘らず字形間の連繋の指示は見逃し得ない示唆を与えている。例えば、「遺言」という字形がある。

𨮒この文字は『文海』の分解では𨮒死す、𨮒言葉、𨮒遺す・留めるに3分割される。即ち、「死に際して留める言葉」であり、一つの字形に表現するべき必要なKey情報が凝縮していることがわかる。この文字は、『類林』や『大宗要選文』の中でその意味で使われている。

また、𨮒 w^hr (平84) という文字がある。『孔雀明王経』や『十二縁生』に出現して𨮒夭逝(若死に)にあたり、蔵語 *hchi-bdag* ‘死魔、死神に取り付かれて早死する’の意味で使われる。この字形は、𨮒寿命の偏の上部と𨮒否定と𨮒全、足りるから成ると西夏人は分解する。つまり、寿命を十分使わずに死ぬという情報をよく伝えている。もう一つ興味深い例をあげておこう。西夏文字で罽丸を意味する字形𨮒 le (平37) は、𨮒𨮒𨮒根の下(の球)と説明されるが、これは、上掲の「遺言」と共にこの文字の最高傑作字形の一つであると筆者は考えている。

もう少し例を挙げると、𨮒 kī^u (平59) 宝物は a | と b | と c | の3要素が𨮒 の

襦ta(平23)頃は、襦讃の偏と襦美の偏と襦助けるの傍からなる「讃美を助けるもの」、駭laf(平27)障害は、襦上の冠と襦家の偏と中央からなる。家の上にあるもの=障害とはわれわれにとっては意外な説明に思える。

𪛗ⁿdži (平92) 時の偏は𪛗ⁿ日の偏と見ていた。

聿^{1w0} (平94) 焰は𤇀尖の旁と𤇀熱の偏と 𤇀火の冠からなり、「火の先端の熱
いところ」と表現されていた。

𪛗²dži (平67) 鎌は薙鉄の囀いと𪛗秀の旁からなり、「秀れた鉄」の意味であった。その派生字𪛗²m²aw (上20)「(草を)刈る」は偏に縦一画をつけるが、西夏人の意識ではその一画は𪛗手を代表するものであった。

字形をこのように分解し、他の字形と関連づけて教えていたに違いない。その方法は、複雑な字形を記憶するのに大きい便宜があったためであろう。鎌を核とする字形網は上掲p.238を見られない。

他方、派生字をもって基本字を説明したり、単体字を合体字で説明する西夏人の説明には如何にも不合理な面がある。例えば、

𪛗ndofn (平49) 毒は𪛗蝮の中心と𪛗蛇の旁から成ると言う。実際は蝮も蛇も毒の派生字である。単体字の場合は更に不合理さが目立ってくる。

図²var (平82) 八は薙七の冠を除く。

芻 zu (平1) 枷は縄繫ぐ枷をはめる、の冠と鞆縄の下に分解するのも不合理であり、繁雑すぎるように思える。

卅^{k^wuŋ} (平27) 半を飢全の冠と類損うの傍とするのはむしろ不可思議な説明

である。

𐵓₂ (平30) 種を襲生れるの冠と垂母の下というのも素直にうなずけない。

以上考察したように、西夏人の分解は重要な視点を提供するけれども、一部でこじつけの解釈も含まれていて全面的に採用することはできない。

Ⅱ 新視点の導入——双生字論

14 書写語の設定と文字の創作——漢字を超えた特性

さて、このような初期の平面的な分析、いわば表意文字の代表であり、西夏文字創製のモデルとなった漢字の延長として漢字についての知識をもってこの文字を分解している中に、漢字を離れてより内面に入って考察すべきであることに気が付き始めた。果たしてそこには極めて重要な事柄が秘められていた。その発想転換の切っ掛けとなった認識についてまず述べておこう。

本稿のはじめにも記したように、筆者は西夏国にとって、文字の創作と西夏語という書写語の設定は同等に重大な事業であったが、後世の人間にとって後者の方をむしろ重視すべきではないかと考えるに至った。勿論西夏文字を通してしか当時の西夏語を知り得ないのであるが、至少この二つの事業と成果は区別して扱うべきであろう。

拙文『西夏語研究と法華経(Ⅱ)』で書いたように筆者の西夏文字の研究は①文字組織の分析と解明と②言語体系の復元という二つのレベルで扱い、両者の間のバランスを考慮して進めてきた。大まかに提示すれば、両者の関係は、①単対単②多対単③単対多の三種に要約できる。どの言語についても①のタイプが理想ではあるが、西夏語の場合は②のタイプが予想外に多かった。つまり二つ以上の異なった字形が実は同じ一つの言語単位に対応する場合が多いのである。

もっとも初めに浮かんできたのは声調の相違を書き分けている例である。二、三例示しよう。

例	1	文字レベル	言語レベル
字形 1	𐵓	tshi (上9)	同じ一つの西夏語単位 tshi (上)「根、根本」にあたる
字形 2	𐵓	tshi (平10)	

tshi（上）はある環境において上声から平声に変調したが、その変調形に対して筆画を増加した専用の字形を造っていた。言葉のレベルの密接な関係が字形上にも反映している。

例 2 文字レベル

言語レベル

字形1 𐵓 𐵔 mbifi（上）mbefi（上） | 同じ一つの西夏語単語

字形2 𐵓 𐵔 mbifi（平）mbefi（上） | mbifi-mbefi「高低、上下」にあたる

低高（高低）、上下は上声－上声の連続であったが、ある環境で平声－上声の連続に変わった。字形2はその変調形を記録している。後者の例は『掌中珠』において「人有高下」𐵓 𐵔 𐵓 𐵔と記載されているから口語形式であったことは明らかである。そのほか『法華経』『禅源』『大宝積経』にもこの旁を加えた字形2が使われている。『天盛律令』では専ら字形1が出てくる。

同じく「問う」「得る」なども一つの言語単位が変調現象を起こして、それぞれに専用字が創られていた。本来各々に一つの字形があればことが足りた（例は後述する）。

このような言語変形に対する専用字形の創作は上述の声調変化のみではなく、西夏語という言語の根幹にあたる部分にも及んでいることが次第にわかってきた。筆者はそれらの議論を一括して「双生字論」とよびたいと考えている。以下その新しい提案を展開していきたい。この提案は当初の字形より言語を見ていた方向から、反対に言語レベルの面より字形を見る方向に転換したと言い得る。

15 双生字の発見

西夏文字の創作者は意味上あるいは文法上密接な関連を持った2つの言語単位を字形の上でも類似した形式で表現する手段を考え出していた。筆者はその一対の字形を「双生字」と呼んでいる。多くの場合、西夏文字のその一対の字形は、漢字の一字に対照される。

次のようないくつかの種類の双生字があったが、もっとも重要な語幹変形の例をまず述べておきたい。これは環境による変化ではなく、西夏語構造の根幹に関わる問題である。

a) 語幹変形双生字

西夏語の他動詞の一部は語幹形式を屈折させた。例えば「見る」にはA 𐽀 leñ (上33) とB 𐽀 li (上9) があり、「悟る」にはA 𐽀 tseñ (上33) とB 𐽀 tsif (上10) があった。

筆者は、動詞語幹の二形式を語幹A形式と語幹B形式と呼んでいる。共に後ろに人称代名詞（先行語照応形）を接続し得たが、B形式は行為者（主語）と照応する行為者視点文を構成した。それに対して語幹A形式の場合、人称接辞は先行する目的語と照応し、受動・受益者（目的語）視点文を構成した。¹⁶⁾

AB両語幹形式は、意味情報のほかに、文法情報をも伝達していることになるが、冠の形の対立とか別の一画を添接することによって、その情報を表現した。このような関係にある2つの字形を「語幹変形双生字」と呼ぶ。相互に関連して記憶できるよう極めて類似した字形を与えている。この種の書き分けは、たぶん表音文字、特にチベット文字の形態にヒントを得たものであろうと筆者は考えている。代表的な例を挙げる。

語幹A形式	語幹B形式	意味
𐽀 wi (平10)	𐽀 wĩñ (平51)	送る
𐽀 wi (平10)	𐽀 wĩñ (平51)	造る、する
𐽀 khĩn (平56)	𐽀 khien (平42)	与える
𐽀 dʒeñ (上32)	𐽀 dʒĩñ (上44)	もつ、有る

b) 平声・上声双生字

西夏語の動詞は、ある脈絡で変調現象を起こした。例えば平声の動詞は、上声の接頭辞の後で上声に変化した。西夏文字組織は、この変調形式を、もとの形と字形上酷似させながら別の字形を造って書き分けた。𐽀 yir (平86)「問う」は接頭辞 𐽀 rir (上) や 𐽀 ndañ (上) の後では 𐽀 yir (上77) で書いている。この一対を平声・上声双生字と呼びたい。𐽀 lañ (平17)「織る」と 𐽀 lañ (上14)「織る」、𐽀 mĩ (平)「貫く」と 𐽀 mĩ (上)「貫く」も同じ条件にある双生字である。上掲の根、根本や後述の語のように、名詞にも同称の変調現象があり双生

字が造られていた。

上述のa) 語幹変形双生字とこのb) 平声・上声双生字が組み合わさると、4種の変形が生まれることになる。事実その4形式を書き分けた「四つ子字」（複双生字）があった。同じ一つの動詞「得る」が4つの対立した字形で書き分けられている。

「得る」	語幹A形式	語幹B形式
平声	𪛗 rir（平79）	𪛗 rīor（平90）
上声	𪛗 rir（上72）	𪛗 rīor（上81）

「嫌う」「悪む」にも4形式が揃っている。

「嫌う」	語幹A形式	語幹B形式
平声	𪛗 khīē（平9）	𪛗 khīow（平50）
上声	𪛗 kiē（上8）	𪛗 kīow（上43）

この上声形式は何故か無声無気音になっている。

『六韜』に、𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 「帝、これを悪んか（汝は）」（行為者視点文）
 ʰdzʷi（平30）mafi（平20）khīow（平50）-nafi（上17）の例があって、語幹B形式が使われる。人稱接辞を持たないA形式も、同じ『六韜』の中に、つぎのような形で出てくる。𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 tefi（平36）ʰdzʷʰfi（上44）si（平30）khīē（平9）wiēfi（平12）ʰdzu（平1）‘凡そ人は死を惡み生を楽しむ’。平声韻に続く環境で語幹A形式の平声字が現れる。

上声韻の例は『孫子』にある。𪛗 𪛗 𪛗 𪛗 kə（平63）kiē（上8）tsi（平30）tīafi（上18）‘命を嫌うにも非ず（非惡寿也）’、語幹A形式が使われるが平声の環境の中で上声韻形式が現われているから、「嫌う、悪む」は本来は上声韻であって、平声の方が変形であったことを示している。平声の語幹A形式の使用例には𪛗 𪛗 pīōfi（平51）khīē（平9）譏嫌（嫌惡）（『大宝積經』）などがある。

c) 名詞・動詞双生字

西夏語には、名詞形が平声で対になる動詞形が上声をとる形態がかなり多く

あった。声調の対立が品詞を弁別し、その声調変化が派生機能を担っていたのであろう。両者が酷似した字形で書かれることもある。それを名詞・動詞双生字と呼びたい。

名詞 (平声)	𪛗 ɛzi (平67)	鞋
動詞 (上声)	𪛗 ɛzi (上60)	鞋をはく
名詞 (平声)	𪛗 ɛzar (平80)	羞恥
動詞 (上声)	𪛗 ɛzar (上73)	恥ずかしい
名詞 (平声)	𪛗 tšie (平34)	笠、冠、傘
動詞 (上声)	𪛗 tšie (上31)	笠・冠を被る、傘をさす
	𪛗 tšhōw B形式	
名詞 (平声)	𪛗 ndur (平84)	敵
動詞 (上声)	𪛗 ndur (上76)	競う

次の例は、声調の対立ではないが、音形式に微妙な差異があったらしく、反切で弁別されている。やはりこの種類の双生字と考えたい。

𪛗 mbi₂ (平67) 尿：𪛗 mbi (平67) 「放尿する」

mbiは羌語系の語形であり、現代羌語(桃坪)bie241(麻窩)bi 道孚語bi 普米語(箐花)sbie 55 (桃巴)bi 53などはいずれも同源語である。

d) 主格・斜格双生字

指示代名詞「それ」と疑問代名詞「誰」には主格形(平声)と斜格形(上声)を書き分ける双生字が造られていた。¹⁷⁾

	「それ」	「誰」
平声	𪛗 thaŋ (平20) 主格	𪛗 s'ɿ (平30) 主格
上声	𪛗 thaŋ (上17) 斜格	𪛗 s'ɿ (上28) 斜格

平声・上声、各形式の機能は次のような関係になる。誰を例とする。

誰 (平声) → 誰は、誰が

誰（上声）N → 誰のN

誰（上声）V → 誰をVする

即ち、上声韻形式は平声韻+属格・対格助詞の形と等しい機能を持ち、甌は甌 𐵓s^wi（平）ʔyef（平）と同じであり、𐵓は𐵓 𐵓thaf（平）ʔyef（平）と等価値であった。この上声調は現代ビルマ語の第三声調にあたるように、ビルマ・ロロ系諸言語の形態と一致している。ここでは具体的な対応例を省略するが、拙論『西夏文字新考』を見られたい。¹⁸⁾

e) 自動詞・他動詞双生字

自動詞形（有声無気音）と他動詞形（無声出気音）の対立を代表する双生字も造られていた。

自動詞

𐵓dž^wi（平10）溶ける

𐵓ndur（上76）燃える

𐵓dzir₂（平86）切れる

𐵓džicn₂（平56）離れる、切れる

他動詞

𐵓tshi（平10）溶かす

𐵓thur（平84）燃やす

𐵓tshir₂（平86）斬る、殺す

𐵓tshicn₂（平56）離す、切り離す

自・他両動詞の対立は、一部でこのように初頭子音の有声無気音と無声出気音によって弁別された。¹⁹⁾ しかし、𐵓mbië（上8）「開く」と𐵓phië（上8）「解く」のように同じ条件にある自・他動詞の関係でありながら、双生字で表記しない例もある。（後述参照）²⁰⁾

初頭子音の対立による自・他動詞の弁別は次に挙げる緊喉母音による語彙的使役動詞構成の手順と共にチベット・ビルマ系言語の形態法と一致するのである。²¹⁾

f) 使役・非使役双生字

非使役動詞が緊喉母音化して使役動詞を構成する手順が西夏語にあった。両者の対立が双生字によって表記されることが多い。

非使役動詞

𪛗 kuf̃ (平4) 緩む

𪛗 thif̃ (平11) 飲む

𪛗 lu₂ (平1) 混ざる𪛗 ŋg^wif̃ (上10) 服を着る

𪛗 ŋgĩof̃ (上44) はそのB形式である

使役動詞

𪛗 ku (平58) 緩めさせる

𪛗 tĩ (平67) 飲ませる

𪛗 hlũ₂ (平58) 混ぜる、こねる𪛗 ŋg^wĩ (平67) 服を着させる

上述の双生字相互の間には、1) 添接法、あるいは2) 置き換え法による派生法が採用されている。このほかにもう一つ固有語と借用語の間にも双生字が造られていた。

g) 固有語・借用語双生字

西夏国が建立されるまでに主要民族であったミ (Mi) 族とミニャック (Minyak) 族は、常に漢族と接触し、絶えず文化交流を重ね、多量の漢語を借用していた。借用語は数段階を経て受け入れられたために、単純な対応法則によって処理できないほど複雑な様相を呈している。11世紀以降の文献では、対応する漢語は主に部姓字 (部族の姓を書き表す) を用いて音写して漢語と注記したが、たとえば𪛗 k^wq (上58) には𪛗𪛗𪛗𪛗 漢語でtšhĩu²鋤と謂う (『文雜』) のように音写した形を注記した (道具類が多い)。11世紀より以前に受け入れられて、文字を造った時にはすでに西夏語の中に溶け込んでいた漢語には専用の字形を造っていた。11世紀初頭までに固有語と借用語が併用されていたことが分かるが、その字形は i) 固有語を書き表す字形を基本にして、それからの派生字形を借用語を表記する字形としている場合と、ii) その逆の場合がある。そしていずれの場合も、双生字と言えるほど両者の字形は類似している。前者を「夏漢双生字」、後者を「漢夏双生字」、一括して「固有語・借用語双生字」と呼びたい。²²⁾

i) 夏漢双生字（固有語→借用語）

𦉳 fū (上52) 糞

𦉳 pən (平15) 糞

𦉳 kīw (平45) 年

𦉳 s'wī (平10) 歲

𦉳 ʔi (上28) 寝る

𦉳 mī (上7) 寐

𦉳 ɲifh (上12) 望む

𦉳 ʔw'on (平54) 望

𦉳 kuḥ (平4) 衣服

𦉳 ʔyi (上28) 衣

𦉳 ndʷuḥ (平27) 知る

𦉳 tsi (平10) 知

ii) 漢夏双生字（借用語→固有語）

𦉳 ndien (上37) 休む、定

𦉳 tq (平63) 休む

𦉳 si (平10) 始

𦉳 ʔyufh (平4) 初

𦉳 xʷI (平8) 灰

𦉳 lafh (平17) 灰

𦉳 ʔifh₂ (上10) 易

𦉳 lefh (平36) 改める

𦉳 ʔdzīw (平45) 腰

𦉳 kir (上72) 腰

𦉳 siḥ (平29) 拭

𦉳 siā (平19) 払う

16 字形網と借用語

意味分野を基に字形網を作ると、たいていの場合、漢語からの借用語が若干登場してきて、固有語と並存する。両者には共通の意符が含まれているものの、必ずしも上述のような双生字を造っているわけではない。双生字を持つ借用語は歴史が古く固有語とよほど密接な状態にあったと言える。双生字で表記されない固有語と借用語の例を挙げておく。

固有語

𦉳 ɲʷu (上1) 泣く、哭く

𦉳 mbi (平69) 涙

𦉳 neḥ (平36)-lbfh (上47) 親戚

借用語

𦉳 tshi (平10) 泣く、哭く

𦉳 lwi₂ (平30) 涙

𦉳 ʔdzifh (平11)-ʔdzifh (平11) 親戚

西夏語の数詞‘十’には、三つの字形がある。

- ① 𦉳 ʔq (上56) ② 𦉳 siā (平19) ③ 𦉳 ʔdzī (平69)

①は固有語、②は漢語‘十’の借用語、③は証書の記年などに使う漢語‘拾’の借用形である。

𐰇𐰣 mən (平31) 𐰇dzɪ (平69) ‘失’火は③と同じ音形式の借用語である。

17 余剰字の創作 表現力の増加と記憶学習負担の増大

西夏文字の創作者たちは、記憶の負担が増大するにもかかわらず、意味伝達の効果が高まるのを期待して、余分な字形を造り出していた。例えば、

(1) 「水獺(かわうそ)」は𐰇𐰣 kɜɟɪ (上85)-vafɪ (平17) と書く。第一の形態素は「水」であるが、後の形態素は実は𐰇vafɪ (平17)「豚」と同一である。西夏語では、獺を無契語の𐰇sɪn (上48) (ɬ: sramなどと同源語)のほかに有契的に「水の豚」と表現する語形も造っていたのである。²³⁾ ただ「豚」の字形をそのまま使わずに隣の要素を「水」に替えた専用字を造って書き表した。このような造字法も、西夏文字組織の特徴の一つである。

(2) なぜか理由はよく理解できないが、「語」にあたる文字はかなり多い。そのいずれもが漢語の‘語’からの借用形であると考えられる。

「言語」は『同音』では𐰇𐰣 ɲʷɔ₂-nɑ (平5-上56) (語言)、『維摩経』では𐰇𐰣 ɲʷɔ₂-nɑ (平5-上56) と書かれ、『掌中珠』では𐰇𐰣 ɲʷɔ₂-nefɪ (平5-上33) となっている。この𐰇と𐰇は共に平声5韻で、全く同音節である。漢語𐰇𐰣、西夏語𐰇𐰣 という時も𐰇の字が使われる。その上声字𐰇は対称字形を持つ双生字で(平声・上声双生字)、例えば𐰇𐰣 𐰇𐰣 「同義語」のように先行する上42-上38韻に同化し変調した形式ɲʷɔ₂ (平5) を書き表した。この𐰇は時に動詞として使われる。𐰇𐰣 「語らず」。平声5韻には他に𐰇𐰣 ɲʷɔ₂ があって、専ら漢語の‘曰’いわくの訳語となった。『論語』の‘子曰’は常に𐰇𐰣 nɔfɪɲʷɔ₂ と訳される。他に旁に口をつけた𐰇 ɲʷu (平1) もある。ɲʷɔ₂ (平5) は日 rɪwät>jɪwet にあたり、ɲʷu₂ (平1) は語 ɲia>ɲio に対応するのであろうか。

(3) 𐰇𐰣 khɪ (上28)-ɲen (上37) 「牢獄」𐰇𐰣 thɪ (上37)-ɲen (上37) 「地獄」の獄は本来𐰇ɲen (上37) 「家、舎」と同一の形態素である。「獄」の苦しみを字形上に強調するために𐰇 rɪɛ (上68) 「苦しい」を意符とし隣の位置に置いて牢と対称字形にしたのである。また𐰇 dzon (平54) 「囚(とらえる)、囚人」

も𐵓 tṣi (平67)「苦しみ」を意符とし、木冠をつけた会意字である。²dzonは藏語 *btson-pa*「囚人」と同源語かまたは借用語であろう。

(4) 太陽 𐵓 𐵓 lɛ (上54)-sɔŋ (上42) の陽

太陰 𐵓 𐵓 lɛ (上54)-thi (平65) の陰

この陰と陽を組み合わせた陰陽は、thi-sɔŋとなるが、その表記には別の字形 𐵓 𐵓 が使われる。この2字は明らかに余剰字であって、「上陽」「下陰」として把握するとき、上下の要素を傍の位置に配した字形を特に造ったのである。

(5) 「上」「下」も字形の上では、「水準より高い(ところ)」と「水準より低い(ところ)」と表現されている。

上 𐵓 𐵓 mbi (平30)-mbefi (上33)

下 𐵓 𐵓 mbi (平30)-mbifi (上10)

第一の形態素 mbi は一定の高さの水準を示す言葉であったと筆者は解釈した。それは上下に共通する全く同一の形態素であるにもかかわらず、第二の形態素の字形と調和させて傍の位置にそれぞれ「高」と「低」を配して別々の字形を造り出している。その中の一つは本来全く余分なものであった。

(6) 𐵓 naf (平17) 夜と𐵓 𐵓 naf (平17)-rar (上73) 明日を比べると、明日の第一形態素は夜とまったく同一の形であり、明日は「夜を越えた日」と表現されていたことがわかる。しかし明日と夜は違った字形で書き表された。夜の傍を越える 𐵓 の傍と置き換えたのが明日である。これも余分な字形であったといえる。(cf. ビルマ文語: *nya* 夜、*nak* 暗黒、*nak-phran* 明日、逐語的には「暗が解消する(とき)」と表現されている)

これらは字形上に意味伝達の効果を反映させた西夏文字特有の造字法であって漢字には見られない手順である。また字数の上で圧倒的優位を誇った漢字に対抗する西夏文字考案者たちの一つの挑戦であったかもしれない。

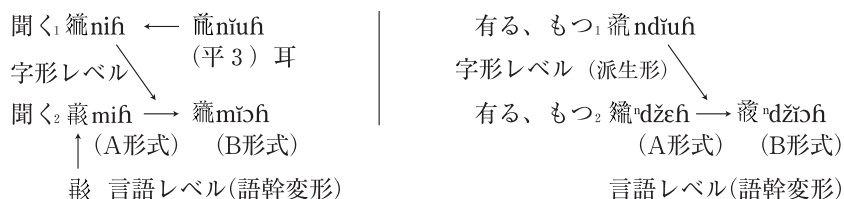
18 字形配分のずれ(ずらし)

西夏文字の組織に、他方合理的でない面があることも述べておかねばならない。それは西夏語の形態素間に見られる意味上の関連とそれを表記する字形間の関連を探る中に一種の「ずれ」あるいは意図的な「ずらし」と呼べるような

奇妙な現象が存在することを発見した。つまり、文字レベル上の関連と言葉レベル上の関連の間にずれがあった。

動詞語幹変形双生字、例えば「言う」のA 𐰇𐰺tshĭēŋとB 𐰇𐰺tshĭŋに酷似した字形を創ることは理にかなっている。その配分は記憶に便利でまた理解しやすくできている。ところが同じ語幹変形の関係にある一部の動詞ではその配分が明らかにずれているのである。如是我聞の「聞く」のB形式は𐰇𐰺mĭŋであるが、A形式𐰇𐰺mĭŋ (平11) の字形とは関連せずに、もう一つの別語幹の聞く 𐰇𐰺nĭŋ (上10) からの派生字形が与えられている。一方mĭŋは𐰇𐰺ndrĭər (上78) 「覚える」から派生した字形をとっている。

同じように𐰇𐰺džĭŋ (上32) 「有る、もつ」のB形式𐰇𐰺džĭŋは、別の語幹𐰇𐰺ndĭuŋ (平3) 「有る、もつ」から派生した字形で表記される。



このように、字形配分に素直ではない「ずれ」、意図的に見ると、「ずらし」があるのは何を意味するのだろうか。

西夏文字のような煩雑な文字は記憶の負担が大きい。当然表現、伝達の効果を考慮しなければならない。上述のように一方でその効果をねらった余剰字を多く造っていた。その効果を犠牲にしてまでもこのようなずれ、あるいはずらしを行う必要があったのであろうか。ずらしの例をもう一つ挙げよう。

I mbĭē (上8) 𐰇𐰺 解ける : phĭē (上8) 𐰇𐰺 𐰇𐰺: 解く
 II* ləw (上38) ×自由になる : hləw (上38) 𐰇𐰺: 自由にする

西夏語の「解ける」と「解く」、「自由にする」は上掲のような関係になる。これはビルマ語の I *prei-phrei*-と II *lwat-hlwat*と対応し、確かな同源語である。*hlwat*は蔵語 *glod-pa=lhod-pa* ゆるめるとも同源である。もし I の単語セットに

字形𣎵：𣎵を配分していたならば、記憶の負担が減り、伝達効果も上がっていたと思える。例えば、「解脱」はx𣎵 𣎵と書く。しかし実際には、mbiē-には𣎵mbɔfɪ「孵化する」と関係する𣎵を造って「解脱」に𣎵 𣎵mbiē-hlɔwをあてた。

西夏文字は、少なくとも一部では言葉の構造によく順応させた造字法をとっていなかった。それはむしろ西夏文字を特に漢人には容易に習得しにくい神秘的な一種の暗号めいた文字に仕上げるための一つの意図的な手段であったかも知れない。偏・旁・冠などの文字要素を組み合わせる方法は確かに漢字を模倣したが、創作にあたって考案した設計図は、漢字とは相当次元の異なるものであったに違いない。

19 文字の統合関係と連合関係

もう一つ文字組織の問題として統合関係と連合関係について述べておかねばならない。

言葉を共時態でとらえる場合、言語の各単位は統合関係と連合関係の2面から取り扱われる。前者は、both-andの関係であり、後者はeither-orの関係と言える。文字についても同様である。双生字は这其中、連合関係においてのみ成立し、対称文字という見方は統合関係において成立する。例えば𣎵と𣎵の字形は𣎵^{ab}と𣎵^{ba}のように偏と旁が対称的な関係にあるが、「越える」という一つの動詞の変形を表記しているのであって連合関係を問題にする時のみに現れ、統合関係としてはどちらか一つしか現れ得ないのである。共に「問う」を意味する𣎵と𣎵も同じ関係に立つ双生字である。それらに対して、例えば𣎵ŋgi（上61）と𣎵ŋgɛ（平61）は冠を対立する対称字形を示しているが、『掌中珠』や『三才雜字』の中で2字連続して「星宿」の意味に使われるから、両者は双生字とは呼べない。また𣎵と𣎵も対称字形を持つが、『文海』平声67韻と平声69韻の注記の中で𣎵𣎵「議論する」のように2字連続して使われるから双生字とは言えない。

この統合・連合の両関係を識別することは、言葉の構造を探る上で重要であるのみならず、文字組織を考察する上でも極めて重要なのである。

20 誤字・当て字

文字組織の問題としてではなく、字形運用の問題として当て字を取り上げたい。

西夏文字のように煩雑な字形をもち、相互に識別しにくい文字を正しく使い分けるためには、簡便な発音字典が必要であった。そして標準字形を公に定めておく必要があった。そこで西夏政府は、文字検索字典『同音』を編纂し、刊行した。需要が多かったとみえて、数種の判型の異なる『同音』の断片が多量に現存している。²⁴⁾『同音』のほかにもっと簡便な実用字典があったかもしれない。それでも翻訳仏典には誤字・当て字がしばしば見られる。時には後代の研究者を惑わすものがあり、その発見と正字への転換が正しい解説へと導く重要な指針となる。若干の例を挙げる。

1)『慈悲道場懺法』巻7で禪 𐰇𐰢 (を愛する如く) が使われている。𐰇𐰢にあたるこの文字は、‘部姓’を書く字形で $n\phi h$ (上) と読むが、この脈絡では意味が通らない。明らかに𐰇𐰢 (上) 𐰇𐰢に替わる当て字である。(cf. ビルマ文語: $u^2-hn\phi k$ 𐰇𐰢、普米語(簪花) ne^{55} などは同源語である)

2)『維摩経』で「衆生を荷負するが故に」が𐰇𐰢 𐰇𐰢 𐰇𐰢 𐰇𐰢 と訳されている。4字目は w^wq (上56) と読むが、地名を書く文字である。(『韻書残卷』で「地名」の注がある)²⁵⁾ このままではこの文章は理解できないが、例えば『大宝積経』などで使われる 𐰇𐰢 $^?w\phi-w^wq$ (上56)「担負」のあとの文字に替えて使われた当て字であると解釈すると、この文は正しく読み下せる。なお𐰇𐰢 w^wq (上56) は上声であり、平声の𐰇𐰢 w^wq (平63)「肩」(名詞)に対する動詞形「肩ぐ」にあたる。

3) 西夏語で「寺」は多くの經典で𐰇𐰢 $^?yif$ (平11)- mif (平14) 衆宮と表現される。ところが、藏文から訳された『聚輪供養作次第』(TG. 182, No. 812C) では
色黒大師 造

大庶民𐰇𐰢 𐰇𐰢 中国覚照国師法獅子 伝

となっていて、 $^?yif$ (平11)- mif (上12) が使われる。本来の平声字に替わって上声字が現れているのである。

書き手の発音に随ってこの字形を使ったのであろう。もとの平声字に改めな

ければ「衆宮」とは読めない。

4) 西夏選『新集慈孝記』(Cat. 31, No. 616) はいわば西夏版孝子伝であるが、²⁶⁾ 全体43話が収められる中で、24の話の中に動詞化する形態として𐵄wi (上9) が使われる。例えば、

𐵄𐵄𐵄𐵄𐵄𐵄𐵄𐵄 財宝を悉く親戚に分けたり

などの例がある。西夏語の本来の正書法によると、平声字𐵄wi (平10) ーするで書くべきところである。書き手の意図によって、或いは誤って上声字を使ったのである。

『法華経』の中にも同じ意味でこの上声字は1例のみ使われている。その他の経典では見ていない。

5) 我が国の天理図書館所蔵の『高僧伝』(巻5)の尾題の後に押記された四行の西夏文は中国西安にもあってよく知られるが、その中にも当て字が使われている。また、政府の刊行物であったはずの『天盛旧改新定律令』の中でも当て字が現われ、そのために条文の理解を困難にしている個所がある。²⁷⁾

いずれの場合も、それらの文章が西夏語の口語形式を反映して書写されたところから起こった現象であると筆者は考えている。そして西夏文の性格を探究する上で、それらの現象は重要な示唆を与えているのである。

21 まとめ

西夏文字組織の特徴を次のようにまとめることができる。

- 1) 西夏文字は、単音節を主体とする西夏語を効果的に表記するために考案された表意文字の傑作であった。それは意味情報のみならず文法情報をも伝達しており、漢字よりも優れた組織をもっていた。全体で総数約六千字が創られた。
- 2) 外見上は漢字を模倣して、偏・旁・冠などの文字要素を組み合わせる方法を採用したが、独自の発想から文字要素を考案し、必要な Key 情報を含めるよう組み合わせた会意字形を数多く造り出した。その独創性は否定字形と対称字形によく現われている。
- 3) しかし、内面には漢字には全く見られない別の組織が字形の成立を支配していた。一定の条件のもとで変形する西夏語形を忠実に反映して酷似する字形

を造ってそれらの変形を書き分けた。連合関係にある一対の字形を数多く造っていた。それらを総括して双生字と呼びたい。双生字には1. 語幹変形双生字、2. 平声・上声双生字、3. 名詞・動詞双生字、4. 主格・斜格双生字、5. 使役・非使役双生字があった。実際には、語幹変形と平声・上声が組み合わさった四つ子のセット(複双生字)も認められる。実質上は漢字を超えたより複雑な組織を創出していた。文法情報の伝達、意味の効果的な弁別、声調変化の表記などに創意工夫があった。

4) その種の言葉の変形を字形の一部の対立で書き分けるアイデアは、おそらく表音文字(チベット文字)の組織を参考にしたことから得たのであろう。

5) 西夏文字を創作した11世紀始めの段階で、すでに西夏語に溶け込んでいた多量の漢語からの借用語に対しても専用の字形を造った。その場合、固有語を基本に派生字を造り、借用語にあてる場合とその逆の場合があった。後者は借用語を中心に見ていたと言える。それらを借用語双生字と呼びたい。

6) 西夏文字の創作者たちは、記憶の負担が増大するにもかかわらず、意味伝達の効果を期待して余分な字形(余剰字)を多く創り出していた。

7) 他方で、西夏語の形式と字形の配分関係で不合理と思えるずれ、あるいは意図的なずらしを行っていた事実がある。それはこの文字をむしろ憶えにくくし、神秘的な暗号めいた文字にする意図的な面があったように思える。

8) 煩雑な字形をもつ西夏文字は、運用の面でも問題があった。発音字典『同音』を刊行して標準字形を確立したが、様々な仏典の中で、正確な記憶が妨げられた誤字、当て字にしばしば出会う。正しい字形への転換が未解読の諸文献の確かな解読への道を招いていく。

9) 使用例を発見できない文字も少なくはなく、たとえ文献上に使用例があっても字形間で弁別する必要がある意味や機能を詳しく確定できない文字がなお多く残っている。²⁸⁾

10) 西夏文字は漢字文化圏の中で、日本人が漢字から2種の仮名を造り出した偉業に比肩し得るもう一つの表意文字システムの大革命であったと考えてよいのではないだろうか。それを漢字の延長として見ている限りその組織は到底解き明かすことはできない。別の次元で検討しなければならない。残念ながら、その文字は今では伝承されていないし、そのシステムを継承した文字も現存しな

いが、幸いその文字で書き残された文献は大量に出土し、現存している。

西夏人は極く短い期間でこれだけの文字をよく創作したものと感服せざるを得ない。

最後に強調して述べておきたいのは漢字についての知識のみではこの文字の組織は解明できないということである。別の次元で検討しなければならないという認識である。そして個々の字形の意味が判明しても文全体の正確な判読はむつかしく文法面で未解決の問題がいろいろとある上に、一定年の経験が不可欠であることをつけ加えておきたい。より正確に読み取るためには至少つぎの2点に注意すべきである。

I 単語形式（詞）の形と意味を把握すること

II 部族語形式を弁別すること

I 単語形式の把握について2例あげておく。西夏語訳のみが残る『近住八斎戒文』の中に、つぎのような記載がある。

「善行を行った者は𐽄𐽀𐽂 (獄簿より除き)、罪を犯した者は𐽄𐽀𐽂 (獄簿にとどめる)」。この𐽄𐽀𐽂 (上32) は𐽄𐽀𐽂 (平58) 網の中心と旁と𐽄𐽀𐽂 (平67) 「入れる」の旁から出来ており「檻に入れる」の意味である。𐽄𐽀𐽂 「軍紀」という使い方 (『文海雜類]) や𐽄𐽀𐽂 「主簿者」という表現に使われている (『類林])。また𐽄𐽀𐽂 (上32)-kq (上56) (仁義の) 紀 (綱紀) という表現もあった (『六韜])。「八斎戒文」で獄簿とっているのはいわゆる「閻魔帳」の意味であることは容易に判明する。𐽄𐽀𐽂 「除く」の原義は「折る」(上述) で、𐽄𐽀𐽂 「とどめる」の原義は存在動詞「有る、持つ」である。

『仏頂心観世音菩薩陀羅尼經』の中に「小沙弥は官人と共に舟上に坐る」という句がある。この官人は𐽄𐽀𐽂 と訳されている。逐字訳すると「税を取り立てる者」žɛ (上54) tɔ (平64) mīɛ (上68) となる。新しい単語を造り出している文字相互間の塔配 (組み合わせ) が問題になる。

漢文と同様に西夏文においても虚詞の研究は重要である。虚詞は兼用字であることが多く、多機能をもっていた。たとえば𐽄𐽀𐽂、𐽄𐽀𐽂 mɔɬ などいづれも多種類の機能表示に使われている。

- | | | | | | |
|---|-----|----|-----------------------|---|-------------------|
| { | 𪛗 𪛗 | 下顎 | mi (上28) nefi (上33) | 𪛗 | mahe, mane (Amdo) |
| | 𪛗 𪛗 | 上顎 | khin (上29) kafh (平17) | 𪛗 | rkan~dkan |

部族語形の表記

- i) { 糲 糲 死亡 si (平30)-meh (上33)
 齋 齋 死亡 si (平69)-meh (上33)

ii) { 蕻 靛 奴婢 phɪŋ (平14)-kʰiɛ (上31)
 礪 靛 奴婢 phɪf (平11)-kʰiɛ (上31)

1. 𪛗 nɑ (平64) 2. 𪛗 nʷi (平30) 3. 𪛗 si (上10)
4. 𪛗 thɿ (平65) 5. 𪛗 𪛗²u-sĩo (上1-平57)

韻書『文海』の中で1. 𦵏には「𦵏 𦵏 𦵏 (神也) | (平64) とし、4 𦵏には、

「𐵓 𐵓𐵓 𐵓𐵓 𐵓𐵓 𐵓𐵓 (陸神=地神也、天神也)」と書き(平65)、また2. 𐵓 には「𐵓 𐵓𐵓 神也、天神、地神の意」などと解説するのは、一つの部族語形式を別の部族語形式に置き換えて説明したものである。

蔵語系を代表する lha の形は西夏語にはなかった。現代納西語(西部) phy³³la²¹、アムン語 phur³¹ia³³などは、WrB *phura*² ‘仏’に対応する形式である。18世紀緬甸語 B rase<rasi 仙(語彙番号347)は、khsiの伝承形であろうか。

以上考察したように西夏文字は複数の言語体系に対して考案されたものであったと結論せざるを得なくなった。そして西夏語という書写語そのものが均質的な性格をもった体系を具えておらず一種の部族語形の複合体もしくは混合体であったのではないかと考えるに至った。固有の話し言葉と多元文化をもった種々の構成部族の姿がそこに見えてきた。皇族貴族を除いた構成部族を大別すると、本稿のはじめに書いたように氐羌系部族と西南夷系部族になるが、各特徴を超越したところにこの書写語、西夏語があった。語彙面では後者が優先し、文法面では前者が突出したのかも知れない。

筆者はかねてから、文献によって西夏語の表現法が少し時には大きく相違することに気付いていた。ある文献では筆者の言う視点文が多く使われているかと思うと、他の文献では全く使われないことがあった。たとえば『大方広仏華嚴經』と『地藏菩薩本願經』を比べると両者の間に大きい距りがあり、後者では多くの複雑な表現法が使われている。各文献は書き手(或いは翻訳者)の意志によって、どの部族語形を優先させているかによって、この現象が起こっているとは今考えている。

この結論は、党項羌人の族源考究と共に、西夏語の系統を論じる上で大きい意味を持っている。

13世紀に書写語(西夏語)は国家と共に一応滅亡した(実際は16世紀まで存続した)。しかしその基盤となった話し言葉(党項語)は、祖先が曾ってそのような書写語を書いていたことなどぞ知らぬ顔で今なおいわゆる川西走廊地域で生き続けている。

注

- 1) 筆者がいま構想している蔵語方言群の成立について一言ふれておきたい。Proto Tibetan (西蔵祖語) から分離した数種類の言語は7世紀には青蔵高原を中心に広く分布していた。その中には、シャンシュン語、ギャロン語そして門巴語があった。その中核をなす言語群は7世紀以降に成立したチベット文語の東方進出によって統合され蔵語方言群を形成したが、ギャロン語や門巴語はその枠外に取り残された。そしてシャンシュン語は書写語古典チベット語の成立に大きい影響を与えていた。

青蔵高原における氐羌系諸部族の羌蔵語群と西南夷系諸部族の彝緬語群の交流と発展の考究は容易ではないが、今後大きい研究課題となるであろう。

藏族が今日のような大民族に結集したのは13世紀頃と考えられている。(cf. 王堯・黄維忠『藏族与長江文化』武漢 2005) 蔵語が全国的にやや均質的な性格をもつ方言群を擁しているのは、チベット文語の長期にわたる普及、即ち蔵仏教の学習を通して実現した寺院教育の結果と見てよいであろう。

西夏国においても同様に仏教の伝播と共に西夏語訳經典の学習を通して全国的に均質的な書写語の普及が実現していたに相違いない。

- 2) そのほかに皇室貴族層では、別の言葉を話していたと考え得る。筆者の言う雅語層 (cf. 注12) がその言葉とどのように関係するのか今後の大きい検討課題である。西夏国の社会組織はまだ十分解明されてはいないが、一般民衆には「黒頭」と「赤面」の二層の存在が認識されていた (『新集錦合道理』にはこの両語が対照的にしばしば使われている)。「黒頭」とは鮮卑族、吐谷渾の習俗を伝えたもので本来は北方から来た遊牧民であった可能性が大きい。(cf. 拙文「西夏の「黒頭」と「赤面」をめぐって」東方学会報No. 56、1989年)

西夏国の部姓と鮮卑族の部姓は重なるところが多いことは証明されている。(湯開建『党項西夏史探微』允晨叢刊107、台北 2005年参照)

西夏国の主流はもと松州 (現在の四川省松潘県) 一帯に居住し党項羌と呼ばれていた。その西北オルドスには吐谷渾がいた。西部と西南部には哥郢羌 (嘉良) と自称する部族が居り、冉州 (現在の茂汶地区) には逋祖羌が、湟州 (現在の四川省黒水県) には南水羌が居住していた。党項羌はもとは農耕を知らない牧畜民であったが、藏族地域に居住し漢族と雑居し始めてその影響のもとで農耕を行うようになった。党項羌がいつ頃形成されたのか確かなことは未だわからないが、大民族羌族の一支でありその中で拓跋部は最強の部族であったことは疑い得ないと思える。(羌族については『羌族詞典』巴蜀書社、2004年参照)

- 3) 四川省の彝族はそれまで使われていた多数の表意字形を整理して819字の表音字形、規範彝文を創り出し現在一般に広く使われている。

拙著『漢字文明圏の思考地図』PHP研究所、1984年参照。また近年貴州省の彝族を中心に漢字のように表意性を活した彝族間の共通文字として、その字形と意味を共通にし読み方は各地の方言音にしたがわせるという規範化の推進が試みられている。拙著『アジア古代文字の解説』中公文庫、B7-20、2002年、p. 266参照。

- 4) 拙著『西夏語研究新論』西田先生古稀記念会編、1988年、p. 81。

- 5) この44種の組合せ様式はここでは改めてあげない。西田龍雄『西夏語の研究Ⅱ』1966年および三省堂『世界文字辞典』所収「西夏文字」の項目を見られたい。(『言語学大辞典』別巻)2001年、p. 538-。
- 6) 西田龍雄『西夏文字——その解説のプロセス』紀伊國屋書店、1967年、復刻版1994年。
- 7) 漢字の部首と酷似した字形があるが、極く少数であり借用とはいえない。たとえば、017木部と𣎵くさかんむり、080馬部と𠂔うまへん、181水部と𠂔さんずい、182言部と言ごんべん、304夏部と夏(漢字では部首ではない)、305鳥部と鳥とりへんなどがある。
- 8) 𠂔冠が動詞であることを指示する例は多数ある。数例あげておく。

{ 𠂔 džiɸ (上44) 長い
𠂔 ? (R?) 引っぱる 漢語の引にあたり、長母音の表示としてダラニの音写によく使われる。cf.拙文「西夏語研究と法華経(Ⅰ)」『東洋学術研究』44巻1号参照。

{ 𠂔 thɪɸ (平14) 雷	{ 𠂔 tshu (平1) 脂肪
{ 𠂔 kiɸ (平60) 雷が鳴る	{ 𠂔 naɸ (平17) 肥える
{ 𠂔 sɛ (上54) 腥い・腥い臭	{ 𠂔 ?q (平63) 武器
{ 𠂔 siaɸ (上18) 腥い臭を発する	{ 𠂔 ?wɛ (平33) 戦う

つぎのような例もある。

{ 𠂔 tsɪɸ (平59) 守る(漢語)
𠂔 ?wɛ (上66) 護る(漢語) 単独でも使われるが二字で漢語‘守護’にあたる。

{ 𠂔 lu² (平1) まざる(自)
𠂔 hlɸ² (平58) まぜる(他)

- 9) 蝌蚪(おたまじゃくし)については拙文「西夏」『モンゴル帝国』所収、世界文化社刊、1969年を見られたい。
- 10) 西夏語に糞屎を意味する語は極めて多い。これほど多くの語形をもつ言語はほかのチベット言語群の中には存在しない。全く驚くべきである。つぎの文字で書き表される。
- 𠂔 wɪu (上2) 𠂔 pən (平15) 漢語 糞の借用 𠂔 ti (平65)
(鳥のくそ?): 𠂔 tiaɸ (上12) 𠂔 tsɪɸ (平77)
- 𠂔 mɸɛ (平61) 𠂔 i (上60?) 𠂔 tɸɛ (上54)
- 𠂔 hɪɸ (平29) 𠂔 tshen² (上36) 𠂔 mbieɸ (平38) 蟲屎
- 𠂔 džiɸn (平56) 蟲屎など
- 11) この種の字形網は、限定した範囲であれば容易に設定し追加することができる。
- 𠂔 tɸ (平63) 手 𠂔 kha (平18) 射る 𠂔 kiɸ² (平34) 臂(うで)
- 𠂔 ?wafɸ (平17) 宝物 𠂔 ži² (平69) 左 𠂔 žɛ (平61) 着く

膝 pɸ (平68) 中 (あたる) 𪛗 nɨ (平65) 均 (ならす) 𪛗 dɨr (平93) なでる、
よる、こする 𪛗 hɨ² (平69) 打つ 𪛗 tɨ (平65) 襲 (うけつぐ) 𪛗 war (平
87) 切り開く

𪛗 rur (平84) 縫う 𪛗 wɨ (上68) 抱く 𪛗 phɔɸ (平49) 灌ぐ・・・いずれ
も𪛗の派生字である。

- 12) 西夏語には二つの語彙層があった。雅語と一般語である。偏の添加がその語彙層
とのかかわりを示す場合がある。

I 雅語

𪛗 kheɸ (上33)

𪛗 khɨn (平56)

𪛗 tsɨ (平67)

II 一般語

𪛗 mbɨy (平38) 楽

𪛗 ʔɨ (平9) 強、力

𪛗 tsɨ (平67) 苦

人偏の添接が一部で語彙層の違いを示す役割を果たしていた。例は『月々楽詩』
から。拙著『西夏王国の言語と文化』、岩波書店 1997年を見られたい。なお『大
宝積經』卷三に𪛗 𪛗「卑賤」と𪛗 𪛗「下劣の人」の使用例があった。

- 13) 𪛗と𪛗は連続して使われる。つまり二字で一単語を形成するのである。文字に
おいても言葉と同様に連合関係 (both-andの関係) と統合関係 (either-orの関係)
の視点を弁別することは重要である。西田龍雄「西夏語研究の新領域」『東方学』
百四輯、東方学会、2002年、pp.4。西田龍雄編『言語学を学ぶ人のために』世界
思想社、2005年 (16刷) 17頁- 参照されたい。

- 14) 𪛗は漢字の𪛗 (𪛗) しんにように同様に偏の扱いをしてよいのではないか。

- 15) 𪛗の旁を𪛗の𪛗と見ている。上述の図解6-iii) にあたる。そして𪛗の𪛗のbは𪛗
nɔɸ「子供」の偏と同じと見る (文海平76韻)。

『文海』の解説に (平76)「𪛗 tshi (平30) 殺糝より大きいのが𪛗 pur (平84) 羔
(子羊)、𪛗 leɸ (上33) より大きいのが𪛗 ɨur (平76)」とあり、また𪛗の解説
には「𪛗 tɨ (上54) より大きく秋には𪛗 𪛗という也」とあって、単に大きいと
いうのみで具体的には何も示されていない。

西夏も他の遊牧社会と同様に羊や牛を種類と生長に応じて細かく分類してい
た。

なお、𪛗 tshi (平30) と𪛗 tsheɸ (上33) の字形は旁で弁別するが部族語間の語
形式の相違を示すものと考ええる。この2形式の并存は大きい意味を持っている。
その対立は、現代彝語の喜德方言 tɕhɨ³⁵と大方方言 tshe¹³「羊の総稱」の対立と一
致するからである。

11世紀西夏語は現在彝語とほぼ同じ状態にあり、両形式に対してよく似た別々
の字形を創ったことになる。cf. 普米語 (九龍) tshɨ³⁵、却域語 tshe、貴琼語 tɕhi³⁵、
羌語 (曲谷) tshe、祖形 chit [補注]

『文海雜類』には𪛗 ʔdɨa² (上16) 羔があつて、𪛗 𪛗 𪛗 ʔyefɨ ʔdɨa²の意とあ
る。殺糝の子、羊の子の意味であろう。

- 16) 動詞語幹ABの弁別と相違する照応関係をもつ二種の視点文についての論証はこ
こでは省略したい。既発表の筆者の諸論文を見ていただきたい。

「西夏語研究雜考」『西夏語研究新論』1998年

- 「西夏語文法新考」『国家図書館館刊』(西夏研究専号)北京、2002年
 「西夏語研究の新領域」『東方学』百四輯、2002年
 「西夏語訳法華經について」『東洋學術研究』41巻2号、2002年
 「西夏語文法新探」『漢藏語研究』台北、2004年
- 17) 西夏語指示詞の近称代名詞と遠称代名詞の弁別はあいまいで、遠称の筈の𐞗thaŋf (平20) が近称代名詞としてよく使われる。ほかに場所の代名詞 𐞑thiuf (上3) こちら、と 𐞒thaŋ (上17) あちらがある。後者は 𐞓thaŋ (上17) と同じ形である。
- 𐞔𐞕 thaŋ (上17) thaŋ (平17) あの仏、あそこの仏 (慈悲)
 𐞖𐞗 𐞘𐞙 𐞚𐞛 彼此和合 こちらとあちらが和合する
 𐞜𐞝 𐞟𐞠 𐞢𐞣 こちらとあちら2つの間 (慈悲)などの使用例がある。cf. 拙文、2004年「西夏語文法新探」参照、p. 360-。なお 𐞤𐞥 thi (上28)-lię (上68) ここ (この方向)、𐞨𐞩 thi-tj (上60) ここ (この所) の表現もよく使われる。
- 18) 「西夏文字新考」『東方学会創立五十周年記念　東方学論集』東方学会、1997年、p. 1339-。
- 19) たとえば 𐞰牙音独字 (上42) を筆者のはじめ平声韻小類10にあて、khɔŋとしたが『韻書残卷』に窺 𐞱 (疑母上42) の反切がついていた。したがって声母は ŋg- であるので小類11と対応させ ŋgɔŋ とすべきことがわかった。裏付けは 𐞲が自動詞であることと 𐞴𐞵 𐞷熱が退く、𐞸𐞹 𐞻退かせる、𐞼𐞽 𐞿暗が除かれる (法華)、𐞾𐞿 𐝼𐝼 𐞶幽冥が悉く消える (大宝12) などの使用例があることである。他動詞形は 𐞳ʔwɔŋ (平71) の形をもつ。やはり双生字である。
- 20) つぎのような三形式セットもある。
 i 𐞱 ŋg*i (平30) 折れる }
 ii 𐞱 k*i (平30) 折れる } cf. WrB kyau² < kyuu
 iii 𐞱 kh*i (平30) 折る WrB khyau² < khyuu
 使用例
 i) ii) 自動詞対 iii) 他動詞の対立を示しているが、i) と ii) は部族語間の相違を代表するのであろうか。
 使用例
 𐞮𐞯 phu-kh*i 木を伐採する (観心論)
 𐞪𐞫 𐞬𐞭 𐞮 p'e (上65) *dzj (平67) khif (平11) kh*i 髪と爪を切り落とす (剃除髮爪 (十二縁生))
 𐞱𐞲 𐞴𐞵 s'i (平10) ŋg*i-kie (平34) 齒が折れ欠ける (莊嚴)
- 21) 拙文「チベット・ビルマ語派」三省堂、『言語学大辞典』2巻(中)、1989年所収。また自動詞對他動詞とするよりは自主動詞对不自主動詞とした方が適切であるかもわからない (待考)。
- 22) また、つぎのような複数の固有語形に対して (複数の) 借用語形が存在する例もある。
- (1) 𐞱 wefi (平35) 往く：𐞱 koŋ (平49) 車 cf. WrT h̄khor-lo : 𐞳 tshia (平19) 車 (漢借詞)

(2) 蕤 *sih* (平11) 樹 𣎵 *phu* (上1) 樹 cf. *WrT shing*, *WrB sac-pang* : 靴 *šiu* (上2) 樹 (漢借詞)

(3) 𣎵 *η^wwe* (上30) 𣎵 *ʔih* (平11) 和衆 (skt. *saṅgha*) : 𣎵 *x^waŋ* (平17) *šɔn* (上49) 和尚 (漢借詞) cf. *WrT hwa-shang*, *grwa-pa*

𣎵 *ʔa* (?) *šu* (平28) 和尚 (導く人) : 𣎵 *sən* (平15) 僧 (漢借詞)

(4) 𣎵 *η^wur* (平84) 山 : 𣎵 *rar* (平80) cf. *WrT ri*, 𣎵 (平25) (漢借詞)

『大悲心陀羅尼經』に 𣎵 𣎵 山樹の使用例があるから *η^wur* も *phu* も同じく 𣎵 𣎵 語系の語彙であろうか。

- 23) 記号の無契性と有契的表現については、拙文「言葉のしくみ、10：記号の特質」上掲西田編『言語学を学ぶ人のために』p. 10- 参照されたい。

西夏語で語形の選択、訳語の決定は必ずしも確定的な基準があったわけではなかった。無契語に対して有契的な表現はしばしば見られる。つぎに興味ある例を若干あげておこう。

『大宝積經』巻1に動物の名が列举される個所がある。「獅子、虎狼、麒麟、熊羆等」これを西夏語で 𣎵 𣎵、𣎵 𣎵、𣎵 𣎵、𣎵 𣎵 と訳している。獅子 *kaf* (上14) *-tsef* (上32)、虎 *h* (上7)、狼 *lɛn* (平32)、熊 *rien*² (上37)、𣎵 *ʔyɔn* (上49) はそれぞれ2音節または1音節の無契語であるが、架空の動物麒麟は *kɛ*² (上31) *tse* (上54)「飾の(ついた)駿馬」と有契的に造語している。

『六韜』のはじめのところで龍、虎と並んで登場する𣎵 (みずち／雨の龍) も架空の動物であるが、これには無契的な造語をしらしく専用字𣎵が造られていた。その発音は牙音類に属すること以外には不詳である。おそらく漢語の変形であろう。

- 24) 『同音』と『三才雜字』は版を重ねて刊行されたため、黒水城出土品中に(スティン、コズロフ収集品共に)多種類の残片が遺っている。拙文『東洋学報』書評、87巻3号、2005年、及び88巻4号、2007年(印刷中)を見られたい。

- 25) 『韻書殘卷』については拙著『西夏文字新論』1998年、p. 25-を見られたい。

- 26) 『新集慈孝記』(『西夏孝子伝』)の原文はロシアの西夏学者ケピンの К. Б. Кеппинг. Вновь собранные записи о любви к младшим и почтении к старшим. Москва 1990を見られたい。そこでは 𣎵 *wi* (平10) に替わって 𣎵 *wi* (上9) が使われている。それは訳者の個人的な特徴であったかも知れない。

- 27) 『高僧伝』の尾題については拙文「西夏語研究と法華經」(Ⅲ) 2006年、p. 26、注57。『天盛旧改新定律令』の当て字については拙文「西夏語研究の新領域」『東方学』百四輯、p. 7をそれぞれ参照されたい。

- 28) 思わぬ字形に出会うことがある。『同音』喉音類に木冠をもった𣎵 ‘時’の字があった(新版44B7、旧版44B1)。その注字は𣎵 *ɬzion* (上64) であるので、共に‘時、頃(ころ)’を意味することがわかる。𣎵 は𣎵 壽命と同じ音形式で共に *WrT tshe*に対応する。𣎵 *ʔyɔf* (上44) は『中華伝心禅門師資承襲図』の中で𣎵 𣎵 *ʔyɔf-ɬeɬ* (上35)「時を失う」として使われていた。同じこの2字連続は『景德伝燈録』にもあって、漢文の幾失(ほとんど失う)に当たっている。

[補注]

もう一つ‘衣服’の例をあげておきたい。西夏語で衣服を意味する単語は四つの形式があった。①𐽀𐽂 theŋ-hlu ②𐽀𐽂 ṅgʷiŋ-təw ③𐽀 tshi ④𐽀𐽂 ṅgʷiŋ-təw ②と④はṅgʷiŋ ‘着る’を名詞化した形‘着るもの’の意であるから除外して (cf. WrT *gron-pa* ‘着る’), ①と②を考察したい。①は西藏語口語形 (拉薩) *thuk*¹³ *lo*⁵¹ に対応する借用語であったと考えたい。‘clothes’ *dug-log* (C.A. Bell, *English-Tibetan Colloquial Dict.* 2 版、1920年)、*dug-log* ‘clothes’ (H.E. Richardson, *Tibetan Word Book*, Oxford Univ. Press 1943年)、*dug-pa* 或 *dug-po* ‘旧衣服、継ぎ接ぎの衣服’ (青海藏文研究社編『新編藏漢小辞典』1933年)、*dug-log* ‘衣服 (西藏口語)’ (『藏漢詞典』甘肅人民出版社、1979年)、*dug-log* ‘衣服’ 于道泉主編『藏漢対照 拉薩口語詞典』民族出版社、1980年)、*dug-log* ‘衣服、衣物’ (『藏漢対照常用詞彙』四川民族出版社、1980年)、多くの蔵語辞典には掲載されていないこの *dug-log* は口語形式であった。

西夏の諺語集『新集錦合道理』の中に「智者を敬わず衣服を敬う。信有る者を愛さず財有る者を愛す」(732) の衣服にこの𐽀𐽂 が使われている。おそらく偉ばった蔵人 (僧侶か官吏) の服を指しているのであろう。当時の西夏国でこの西藏語の口語形式が流通していたとは驚きである。

③ *tshi* は上掲‘羊’とは異って彝語の諸方言にはその対応形はないが、彝語に属する阿昌語はその対応形を保存している (隴川) *tse*²¹、(梁河) *tse*³¹ *me*³¹、仙島語 *tsi*³¹。更に西夏諺語の中に𐽀𐽂 *tseŋ-ṅgʷiŋ* の使用例があり、西番語群の木雅語 *tse*³³ *ngua*³³ とよく対応する、西夏語はその古形式を保持していた。因に貴琼語 *tshe*⁵⁵ *we*⁵⁵ は旧い *tshe*⁵⁵ と新しい *we*⁵⁵ < **wat* < **ɲwat* の結合形である。cf. WrB *wat* ‘to wear’

[追記]

以上考察してきたように、筆者は西夏文字は数種類の構成部族の形式を表記したものであり、したがって西夏語自体は若干の部族語体系の混合体或は複合体であったと考えざるを得なくなった。この結論はまず西夏文字が記録した書写語の解体に取組む作業の必要性を導き出した。11世紀以降約一千年に亘って話されてきた党項族故地の言語 (= 川西走廊言語) とその周辺の彝語の中に、西夏語として伝承される言語単位に対応する形が必ず含まれているはずであり、その探索こそが急務であると考えようになった。今後の西夏語系統論はこの方向で進展し飛躍するに違いないと思う。西夏語形を核とする藏緬語研究を筆者は提唱したい。

記

各民族語の形式は各種の既刊語言簡志 (民族出版社刊) と黄布凡主編『藏緬語族語言詞彙』(中央民族学院出版社、1992年) 等によった。西夏文字フォントは『今昔文字鏡』を使用した。

(にしだ たつお / 京都大学名誉教授)